

徳川みらい学会第4回講演会



「庶民の中の家康公」～伝説と史実のはざままで～

徳川みらい学会理事
静岡産業大学総合研究所客員研究員

中村羊一郎氏



徳川みらい学会の第4回講演会を10月9日(水)、清水文化会館マリナートで開催しました。講師は静岡産業大学総合研究所客員研究員の中村羊一郎氏。家康公の生涯をめぐる様々な伝説をどのように解いていくかを語っていただきました。

要旨は次のとおりです。

家康公伝説(一部抜粋)

・ウサギの吸い物

家康公の遠い先祖が流浪の身であった時に、地元の人にウサギのお吸い物を食べさせてもらって元気を回復したという話があります。ミヤンマーのタウンビョウンという町の兄弟の話や、お釈迦様のジャータカの物語を見ても、ウサギの肉は、非常に高貴なエネルギー源になるわけであり、それを捧げられる人というのは、実は半ば神になるような人だということです。リーが秘められているのです。

・金のなる木

久能山東照宮のパワースポットとして知られる「金のなる木」は、家康公が家来たちに描いてみせた「よろず程よ木(よろず程良き)」、「志ひふか木(慈悲深き)」、「志やうち木(正直)」にちなんだものです。これは、いわば人生訓として広く流布していったようです。

・小豆餅と銭取

浜松市に小豆餅と銭取という地名があります。戦に負けた家康公が逃亡中、茶店で小豆餅を食べていましたが、すぐ追っ手が迫ってきたので、餅を持ったまま逃げようとした。そうするとその茶店のおばあさんが、家康公の後を追いかけて銭を取った、そこから由来し地名になっています。

・桶屋の特権

静岡市にも逃げてきた家康公の話があります。ちょうど仕事

の桶屋の桶の中に自分をかくまってもらい難を逃れたことから、桶屋に褒美を授けようとした。すると桶屋の仕事は出先で掃除を頼まれるが、非常に面倒臭いので、掃除をしなくていい特権がほしいと言ったそうです。

民衆と権現様

江戸時代には、家康公は神とされていたはずですが、敗戦で逃げまわっていたという話が伝わっているのはなぜでしょうか。家康公が戦に負けてとても苦しんだということは、つまりは絶対的な神がそのような弱みを見せることで、一般の人々と接する機会が生まれたということです。その時、神は人間に恩恵を施し、人間は神に対する感謝の気持ちを持続し、長く持ち続けることになりました。権現様である家康公と庶民との接点から、様々な物語が生み出され、世の安定が保たれていた

ことになるのではないのでしょうか。

家康公伝説は、庶民の身近にいた権現様というイメージをつくり出すことで、徳川300年の歴史という安定した社会を下から支え、つかり支える上で大きな役割を果たしたと思います。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 (TEL) 284-9660 (HP) [徳川みらい学会](#) [検索](#)